

社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2016/8/1 No.72

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会
本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

石井錦一牧師の死を悼んで

理事長 木下 宣世

望みの門京葉後援会の会長であられた石井錦一牧師が去る七月四日に突然逝去されました。一週間前の六月二十七日には日本キリスト教団千葉支区の伝道協議会が開かれ、石井先生は発題を下さいました。さらにその夕べには千葉支区の常任委員会にも出席され、意見を述べておられたのです。

八十五歳になられ、以前に較べるとさすが石井先生も少し弱られたかなと思っはいましたが、まさかこれ程急に天に召されるとは思ってもいませんでした。

石井先生は日本キリスト教団松戸教会の牧師として五十五年の長きにわたって働かれました。同時に保育園の園長さらに理事長も務められ、松戸市の教育行政にも深く関わり、大きな働きをしてこられました。もちろん

日本キリスト教団の委員会の委員として



木下宣世理事長



故 石井錦一牧師 活躍されました。特に月刊誌「信徒の友」や伝道新聞「こころの友」の編集長を二十二年

間務められたことは大きな功績であったと思

います。 そのように広汎なお仕事をなさっておられた石井先生が望みの門京葉後援会の会長をして下さったことに大きな感謝をおぼえます。

石井先生は菊地吉弥牧師（下谷教会）、針谷松太郎牧師（木更津教会）、松田基宣牧師（西千葉教会）に続き第四代目の会長として約四十年もの間望みの門を支援して下さいました。

石井先生が会長となられて早速始めた活動はクリスマス募金のことでした。それまでの京葉後援会の働きは会員の方々が施設を訪問して入浴介助、散髪、種々のお稽古事の教授また夏のワークキャンプ等を行うことでしたが、それに加えてクリスマススの時期に全国的な募金活動しようと言われたのです。

当時の委員の方々は予想もしていなかった提案に、そんなことが出来るのだろうか戸惑ったり不安に思ったりしたようでした。

しかし、石井先生の力強い御指導を得て始めたところ段々と軌道に乗り、毎年多額の献金が寄せられるようになりました。

これは一つの象徴的な出来事で、京葉後援会は石井会長の下、その組織においても活動においても大きな成長を遂げてきました。最近会員の方々の高齢化の影響が出てきているようですが、それにしても昔とは較べものにならない程活動が広がったことは事実です。京葉後援会は主として千葉県内の諸教会の会員によって構成されている支援組織です。現在七百名以上の会員がおられます。石井先生はその先頭に立って望みの門の働きのために労して下さいました。

後援会の皆様のお祈りと具体的な奉仕の業がどれ程私たち望みの門の職員や利用者の方々を励ましてくれたことでしょうか。

石井先生の御逝去に際し、深い感謝を献げると共に、心から哀悼の意を表します。

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

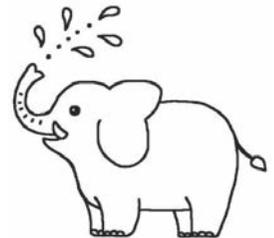
象のはな子



寮長 目黒 眞理

休日の朝食時、象のはな子の話になりました。「井の頭動物園の象舎での一生は、どうだったのだろうか？」に、Aちゃんは「食物の心配がなく安心して暮らせたから幸せだったね」と。退寮生で四十代のBさんからの電話でその話をしたら「私も羨ましい。ずうっ

と居る処があるのだから」と。自由な世界が無く、かわいそうだったとの言葉は出で来ず、彼女たちの不安を知る思いでした。ようやく慣れて安心できる場所になったのに、時期がきたらこの家を出て新しい環境に身を置かなければならない寮生の思いは私たちの想像を遥かに超えたものなのかも知れません。



東京望みの門では、一九六六年に後援会が発足してから毎月の例会と手仕事会が二回開かれます。昨年度は十月に来日されたドリス・グロース先生(MBKミッシェン)の宣教師として来日され十年間寮長として利用者と共に生活されました)がお話をされ、九月に経堂北教会の上野峻一牧師の「地の塩、世の光、何のためにするののか」、二月に亀戸教会の堀川樹牧師の「信頼してくださるお方」の三回の講演会のほか、ヨハネによる福音書の聖書研究を行いました。手仕事会では、クリスマスオーナメントや布巾刺繍、編み物など、クリスマスバザーのための作品作りに励まれました。子ども達は欲しい物があると、あのおばちゃん達に頼んだらとの理解をしています。司会は各教会の持ちまわりですが、いつも心を込めてお祈りを捧げて下さいます。今月

は「それぞれの子ども達が与えられた賜物に気が付き、希望を持って豊かな思いで生活を築くことができそうですよ」とお祈りして下さいました。苦手なこと、駄目なところにも自身も、携わる大人も目が向きがちですが、それぞれ自分の良いところ、好きなどころに気づくことができ、与えられた恵みに感謝できることを祈ります。

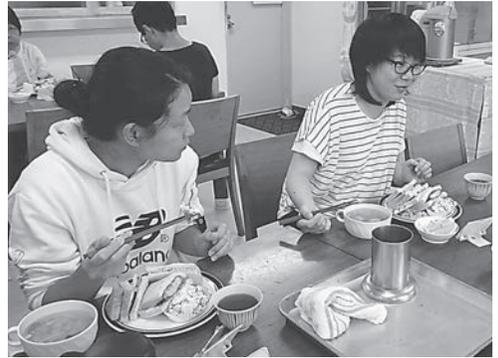
婦人保護施設 望みの門学園

学園での仕事

栄養士 川島 良美

私は、昨年九月に望みの門学園に入職させて頂き、以後学園の栄養士として働くことになりました。初めは戸惑うことばかりでした。入職した当初、学園全員で讃美歌に合わせ、手話の練習をしており、私は今まで手話をやったことがなかったので、歌いながら手話をする事がとても難しかったです。後に、この手話は教会音楽祭での発表のための練習をしている事を知り驚きました。今では二度目の教会音楽祭に向けて毎日練習しています。他には、十月頃に研修旅行で茨城に行きました。私は今まで栄養士業務しかしてこなかったのですが、福祉施設の知識もなく、利用者さんとの関わり方もわからず、どのように行

動すればよいのか不安でした。しかし、利用者さんは楽しんでた様子で安心しました。バイキングなどにも行き、利用者さんの食べっぷりには大変驚かされました。



このように学園では他にも、春期、夏期の外出や花見、ニューイヤークンサートなど、四季折々の行事があり、職種関係なく参加しながら過ごす毎日です。

私は社会人になって五年目ですが、まだまだわからないことばかりです。利用者さんより社会経験の少ない私が、相談相手になれるかと心配ですが、様々な事情を抱えた利用者さんが、日々楽しく過ごし、早く自立した生活に戻るよう職員が一丸となって支援しています。



養護老人ホーム 望みの門楽生園

これからの私

支援員 東 明美

私が望みの門の職員としてお世話になって四年一カ月が経過しました。当初は、五十三歳にしての「介護」の仕事に初挑戦でしたので理想と現実との違い、戸惑いから不安の日々でした。それまでは、介護とは無縁の物作りの仕事を長年していました。

五十歳を過ぎた頃に人生を振り返り、今は「人と関わり人の役に立てる人生を歩みたい」と思い立ったことがきっかけでした。法人で実施していた望みの門のホームヘルパー二級講座を受講して勉強、実習を経て改めて介護の仕事に魅力を抱いたことを思い出します。養護老人ホームは、現在置かれている環境では生活が難しく、経済的にも問題がある六十五歳以上の高齢者が市区町村長の措置に



よって入所できる施設です。特別養護老人ホームは施設と利用者の契約によりますが、養護老人ホームへの入所については市区町村長の決定が必要です。

多様なニーズを持つ高齢者の生活を支援する養護老人ホーム職員には、幅広いかつ専門的な支援スキル（ソーシャルワーク機能）が求められており、介護保険施設に比べて重度の身体介護を要する入所者は相対的に少ないですが、徘徊や人間関係構築に課題のある高齢者への対応や、精神バランスの波に合わせた処遇・対処方法などの特性に対して心得た相談支援はとても重要です。

また、利用者個々の役割や自己有用感、また生きがいを感じながら自己実現に向けた支援を行うことも求められています。

現在の楽生園は高齢化が進み、それに伴い軽度の介護、認知症、障害、精神疾患等を持つ利用者の方が増加傾向にあります。従来の見守り支援から現在の状況・状態に合わせて柔軟な対応ができるように自己研鑽に努めています。趣味（映画鑑賞など）外出等の機会を設け施設生活だから妥協ではなく、やりたいたいことやしたいことは創意工夫により実現できるのではないかと自問自答を繰り返し、利用者の方が自立できる環境・支援について今後も追求していきます。

特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

紫苑荘の介護員として

介護員 端戸 信希

紫苑荘に来てはや一年が経ち、初めて介護職を体験しこれまでの介護の認識が大きく変わりました。今まで配管工・ケーブルテレビの工事業者・ケータイショップの店長・セミナー講師などやってきた私には今までにない職種で戸惑いが多かった。まず、どのような事で戸惑ったか。それは「お年寄り」に直接触れ、介護が必要な方の生活のほとんどをお世話する。しかも「意思の疎通」コミュニケーションが難しくしかも老人なので体は脆く自分の意志で体を動かす事が出来ないで、定期的に体位交換をしなければ褥瘡ができてしまい皮膚も簡単に剥離してしまいます。最初は触れることもままならない状態でしたが、経験豊富な先輩方の助けもあり大きな事故なく少しずつではありますが「介護」を学んでいます。

そして「介護」を通じて人の人生についても改めて考えるようになりました。紫苑荘の「利用者」としてその「家族」紫苑荘に来るまでは介護といえ、自分の親は自分もしくは親族が面倒を見るものだとあまり深く考えた事すらありませんでした。ですが、

紫苑荘で実際に現場を目の当たりにし家族の負担を感じるようになりました。世は少子高齢化・核家族化・医療の進歩により寿命が延びて「看取り三月」でなくなりご家族も高齢になり「老々介護」というとても負担の大きい問題になってきています。この問題がどれだけ深刻かといえば、今年の「介護・看病疲れ」による自殺者二百四十三人内五十代〜七十代が七割を超えます。



そして六割が男性だそうです。この数字だけ見ても家族の負担が半端ではない事が窺い知れます。そしてすべての利用者様が認知ないわけでもなく介護される側にも気苦労があり負担があります。そういった「利用者様」や「ご家族」の負担を大きく和らげる、さらには社会に大いに貢献できる「志事」こそ「介護職」だと思えました。そしてこういった事は人間である以上誰しもが遅かれ早かれは通る「人生」の一つであり誰しもが抱える深

刻な問題であると紫苑荘で介護に従事し一年ではありますが学んだ事でした。稚拙な文章大変失礼致しました。気分を害された方、申訳御座いません。

特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里
笑顔で思いやりのあるユニット

介護員 平野 幸子

富士見の里には、多床室と三つのユニット（悠、雅、和）があります。一ユニット十名の入居者様が各個室を自宅のように過ごされており、その中で私は、雅ユニットを担当させて頂いています。ユニットにより、それぞれのカラーが違い、雅ユニットでは現在、男性三名、女性七名の方たちが入居されています。三ユニットの中で一番自立度が高く、皆様それぞれ、趣味が多彩で、そ



の中でも折り紙が得意な入居者様の居室には色とりどりの作品がこ狭しとズラリと綺麗に並べられ、まるでお花見が出来るかのよう華やかです。他にもちょっとしたアイデアと工夫でアレンジ小物入れ等を作られています。洋服の切れ端やタオルなど、あるもので作くられ無駄な物が一つなく、素晴らしさと尊敬の念を感じています。

皆様、毎日欠かさずラジオ体操を行い、元氣良く、掛け声もあり活気が見られています。食事前や配茶前の手指消毒の時にも、「両手をパンッ！パンッ！」と大きな音を立て、「誰が一番良い音かねー？」と笑いも絶えない和やかな雰囲気の中で過ごされています。

富士見の里では、天気の良い日には三階から富士山が見え、眺めは最高です！眺めと同様に、これからも入居者様が富士見の里に入居されて良かったと思って頂けるように寄り添う介護を目指し、皆様と共に楽しく穏やかに過ごしていければと思っています。

老人デイサービス事業 望みの門訪問看護ステーション

のぞみ会と私



介護職員 安藤 佳子

昨年より暑さが増した夏を迎え、のぞみ会に就職してようやく一年と半年がたとう

としていま

す。諸先輩

方やご利用

者の方々と

比べるとま

だまだ私は

新人です。

しかしそん

な私も少し

ずつのぞみ

会について

わかったこ

とがありま

す。それは、

小さな子供からお年寄りまで老若男女とご利用され、さらに健常者だけではなく障がいをもった方も支援している大規模な総合施設だ

ということ。そしてのぞみ会は富津市の福祉の大きな担い手としての重責を負っている

ということ。そのことを知るきっかけとなったのは毎年開催されている望みの門

バザーと地域交流スポーツ大会でした。昨年

二つの行事に私も参加させていただき、ご利用者と地域の方が一緒に笑顔で楽しむ姿や遠

方から足を運んで下さったボランティアさんの

イキイキとした様子をみて、どれだけこの

施設が皆様に親しまれ愛されているのか肌で

感じるものが出来ました。



また、のぞみ会で働いている職員は福祉に携わるものとして、生活で困っている方がいれば迅速に対応し、ご利用者の小さな変化にすぐに気付き、安心安全に支援できる方ばかりです。仕事の中で日々苦悩しながら走り続けているにもかかわらず、本当に素晴らしいことはどんな時でもいつも笑顔だということ。私も諸先輩方を見習い、いつでも明るい笑顔の安藤”を目指したいと思います。

最後に、五十四年という歴史の中でのぞみ会は現在もおキリストの教えをもとに多種多様なサービスを提供し続けています。はじめは一つだけの小さな施設だったものが今では大きな複合施設となった理由は、のぞみ会職員の努力と精神が積み重なってできたからではないでしょうか。その精神は今も変わらず、私もそれに習い今までの歴史に恥じぬよう、あらゆるミッションを乗り越え心身ともに成長していきたいと思っています。

訪問看護ステーション 望みの門訪問看護ステーション

廃用症候群からの回復事例報告

理学療法士 阿部 忠之

今回は訪問看護ステーションの事例報告をさせていただきます。

Mさん（八十六歳）の依頼が訪問看護ス



テーションに来たのは平成二十六年十一月でした。寝たきり、体力低下、微熱、心身とも衰弱した状態になっておりました。往診医に切り換え点滴を実施し、元気になりましたが、嚥下障害は残ってしまいました。ご家族の意思決定に基づき、平成二十七年一月に胃瘻増設を決めました。

その後、嚥下能力回復を目標としたケアを開始しました。訪問看護ステーションではご家族への嚥下指導も行い、Mさんの嚥下も徐々に回復していきました。この時期のご家族の介護力は素晴らしかったです。徐々に回復意欲がみられ、経口摂取が可能となり、平成二十七年四月に経管栄養は終了となりました。

しかし、残念ながらこの期間に安静を強いられたことにより、褥瘡が生じており下肢の拘縮も生じてしまいました。褥瘡に関してはケアの徹底と栄養状態の回復により完治へと至りましたが、下肢に関しては変形が強く進

行してしまっており、不可逆的な状態まで悪化しておりました。

その中で益々元気になっていくMさん。当初の時期のことは全く覚えておりません。ある日「私、歩けるかしら」と語り始めました。廃用性症候群により寝返りでも痛みを訴えるくらいでしたが、徐々に回復し介助にて起上り・端座位保持まで可能になってきました。リハビリ意欲は日に日に強まり「私、歩けるかしら」も毎日続きます。そこで変形足のままで立上り訓練を試みました。最初は「痛い」でしたが、そのうちに腰が浮くようになり、最後には膝を完全に伸ばせるまでになりました。歩行に現実性を感じるようになってきました。そこで思い切って主治医に装具作成を打診しました。Mさんの廃用という既往と強い足変形を考えると装具作成は例がありません。しかしMさんとご家族、スタッフの意欲により装具を作ってみることにしました。これがQOLです。

そして現在（平成二十八年七月）、Mさんは自力で平行棒歩行を行えるまでになりました。今後の目標は館山へのお墓参りです。今後も訪問看護ステーションでは、試行錯誤を繰り返しながら、関係機関との連携し、本人のやる気を実現させるケアを提供していきたいと思っております。

就労継続支援事業 望みの門 新生活舎

アサリ獲ったぞ〜！



生活支援員 渡邊 宏子

新生活舎では毎年の初夏の行事として富津海岸へ「潮干狩り」に出かけます。海の近くという利点を生かし、誰でも簡単に楽しめてしかも美味しい。自分が獲った分だけお土産にもなるので自ずと頑張ろうとする意欲も湧き出る行事です。

余暇活動は土曜日の稼働日を活用しているため、担当になった職員は早々に潮見表を手に入れ予定を立てます。今年は日頃の行いが良かったのか大潮に当たり、沖の方まで足を伸ばすことができました。事前の職員打ち合わせでは「いっぱいある所を掘り当てた者は速やかに各職員に連絡を出すこと！」と申し送りがあるほどの熱の入れ様。ちょっと大人気ない言動も行事を全力で楽しむ新生活舎の良いところかな？と思います。現地に到着すると皆手際が良く、畑仕事にも思えるような活躍ぶりです。せせせせと熊手を振る、何と五十名全員分の網がすぐに満杯になるほどの収穫となりました。今年は特に大収穫でなんと大きな樽に五杯分のアサリ。海水を二度運ぶほど砂出しが大変でしたが嬉しい結果でした。

「自宅に持ち帰った利用者の皆さんからは、「いっぱい驚いてた!」「お味噌汁にした!」「家は酒蒸し!」「スパゲッティボンゴレ!」「美味しかった!」etc……と翌日の連絡ノートには美味しいお知らせがいっぱいで嬉しい限りです。

利用者の皆さんには毎日休まず出勤し作業に励んでい
るからこそ
余暇の喜び
を感じるこ
とができる
というこ
と。生活に
メリハリが
生まれ、次
への活力に
なることを
伝えていま
す。仕事も
遊びも全力
で!をモッ
トに「さ
あ、次の楽
しみは何か
な?」みん
な一斉に
「ジャンボ



「プール!」と期待に胸を膨らませて明日からの作業に向かう利用者の皆さんです。

千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット
今後の相談支援

センター長 山口 誉典

これまでの社会福祉諸施策は、対象者ごとに展開されてきました。近年の相談内容では、社会構造の複雑化により、一施策だけではカバーできない重複した課題が多くなりました。この課題を解消するため、より細分化した新法が制定施行されています。しかし、結果として、これまでの法律を施行する行政窓口を、より複雑化する要因につながっています。さらには、法律を施行する行政窓口も社会の早い動きに追いついていない状況となり、この変化に的確な対応が求められています。そんななか、千葉県では、「中核地域生活支援センター(以下、中核センター)」が県単独事業として、「千葉県地域福祉支援計画」の健康福祉千葉方式などの方法論の基、スタートをしました。このなかで、福祉を充実するための疑問の一つとして、「理不尽な理由で辛く悲しい思いをしている人はいないか」が起点となり、「誰もが、ありのままに、その人らしく、地域で暮らすことができる地

域社会を実現する」という理念から、「中核センター」を当法人が事業受託し、「君津ふくしネット」の開設につながりました。今後、「中核センター」



は昨今の相談内容の複雑化に対応するため、包括的な相談の支援体制を築いていかなければならないと考えます。

また、行政窓口に上手につなげていくだけでは、根本の問題解決にはならないと考えます。そこには、相談された方の、その時点の生活だけでなく、包括的な視点で、これまでの生き様そのものを受け入れ、ご家族の気持ちになり最適な制度につながるよう、寄り添いながらゴールまで導き、見届ける丁寧な相談支援が大切になると考えます。忘れてはならないのは、相談された方のゴールは、相談された方が生活する地域社会であるということです。

変容する社会のなかで、セーフティネットの一部としての包括的な相談支援を達成するには、机上の話だけではなく、相談された方の生活の場や地域に向き、直接風にあたりながらの包括的な相談支援を展開することが大切かと考えます。まさしく、昨年度から施行された「生活困窮者自立支援法」の理念につながるものと考えます。

富津市富津地区地域包括支援センター
「支援する」よう（こ）と

相談支援員 滝瀬満里子

六月末、地域包括支援センターにやってきました。

今までずっと児童に関する仕事に携わってきた私にとって、高齢者は新しい分野であり身の引き締まる思いです。

分らないながらもとにかく学び、一緒に働く人や利用者のご迷惑とならないようにがんばろう！と思います。

今まで働いてきた児童の分野では学ぶことで得られるものも多くありましたが、自分自身の子どもの時代の体験や、実際の子育ての中から得るものも多く、それが強みとなり仕事の中で生かしてきたと思います。経験を頼りにすることは生活場面の中でもよくあると思

います。

では、高齢者支援を考えた時どうでしょうか？支援する側の私は「高齢者になった経験」がありません。自分の経験が生かせないということになります。自分の経験がないものの中から支援を行っていくということは、利用者のニーズを正確に把握できない中で支援をするということですね。

高齢者が本当にして欲しい支援とは何でしょうか？冒頭でも書きましたように、「ご迷惑とならないように」という風に心がけて日々生活している人は私だけではなく、多くの人がそのように感じて生活していると思います。私よりも長い間生きてこられた高齢者は、もっとそうした思いが強いのと思われ

ます。その時に支援が必要になったとしても、急に「大変でしょ？支えますよ。」と言われたときの抵抗感は、支援する側が考えるよりも大きいのではないかと思います。おそらく



多くの高齢者は、人生の中で困難があった時に自分なりに工夫し乗り越えてこられたいわば「人生の達人」だと思ふのです。そのような「達人」に対し「私が考える何か良い支援をしてあげよう。」と思うことは実はおこがましいことではないかとさえ感じました。

支援するということは単に「何かしたい。助けてい。」と、足りない部分を効率的に補うのではなく、その人に寄り添い、その人生を徹底的に想像し個人の尊厳を守ることから始まるのではないかと気付かされました。寄り添うこと、それは児童、高齢者関係なく支援する際に忘れてはならない福祉の原点であると改めて感じています。

児童養護施設 望みの門かずさの里
就いて一年を過ぎ

児童指導員 浅野 哲彰

望みの門かずさの里に児童指導員として入職し一年余りが過ぎました。入職当初は、子どもを支援し育てるといふ大きく重たい仕事

が自分に務まるのか大変不安でした。その為、まずは得意な運動を通じて子どもたちとの距離を縮める努力をしました。甲斐あって早々に一定の関係が築けるようになりほっとしました。共に遊ぶことも大切な仕事

ですが、なにより私が大人の振る舞いをして、子どもたちに手本を示す事が、大きな仕事だと指導頂き改めて自覚しました。

そこでまず、自身の生活面、身の回りをきちんと整える事を意識しました。自分自身の生活を正す日常行動は、子どもたちの生活支援に直接結びつき、細かなアドバイスが出るようになり、会話も深まりました。何より私生活の乱れは子どもたちへの関わりに、大きな影響を与えようと思ひ特に気をつけております。これらの日々を重ねていくことで、徐々に自信となり、子どもたちへも積極的に関わる事が出来ました。子どもたちの方からも何気ない会話から相談事、不安なことも話してくれるようになり、より一層子どもたちのために頑張ろうと励みになっていきます。しかし、子どもたちの思い、職員としての思いを考えていく中で何度も悩んだ時があります。そのよ



うな時には先輩職員の方々が親身に聞いて下さり、アドバイスやエールを下さいました。先輩職員の子どもの思い、仕事への姿勢を学び、少しでも早く日々成長していきたいです。学生時代、説明会にて戸波施設長に出会い熱いお話を聞き、今の私がいます。かざさの里で働いていることに感謝をし、初心を忘れずこれからも子ども達と関わってみたいのです。

乳児院 望みの門 方舟乳児院

施設生活評価事業

施設長 白鳥 正道

今年度は二年に一度行われる施設生活評価の年で有識者の方々から貴重なご意見をいただくことができました。普段の生活の様子とおし大人と子供とのかかわりの中で普段現場が気づきにくい不自然さや、違和感についてご助言をいただきました。どれも、これから家庭へ帰っていく子供たちがいかに課題を発見し、それを養育者が共通理解していくか様々な視点からのアドバイスでした。

①成長発達の良い乳幼児期に環境があまりに殺風景、②遊びの環境が貧弱、③発達障害の視点が不足、④一人遊びの不足、⑤専門的養育の不足、⑥親の愛着形成の視点、⑦遊

びを暮らすの学び、体験にリンクする等々



建物も落ち着いた雰囲気と色で施設のような殺風景なものではなく、暖か味のある環境を考えたうえで木目を基調としており尚且つ積極的に装飾を排除してきたことも事実でした。今回の指摘は在所期間平均約六ヶ月という短い期間で家庭から親移りを積極的に考えている乳児院では、やはり必要な視点であると思われれます。

方舟を作った意義や思い、子供たちの生活をどう守るか、喪失体験を抱えた子供たちにとって他者との愛着関係を築いていくことができるか試行錯誤を重ねてきた現状からもう一歩歩みを進める時期に来ているのかもしれない

せん。成長著しいこの時期に専門職だからこそ「やれること」、「やるべきこと」を考え続ける必要性を感じています。

「与えられた仕事をこなせば仕事ができる」ではない。「自分はここで何をすべきなのか」、「なぜ自分はここに居るのか」、「何を目的に日々の業務があるのか」もう一度職員で一つ一つ掘り下げてみたいと思います

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家 子育て応援団



管理者 井本 千鶴

ピーターパンの家は、四度目の夏を迎えました。また春には、今年度開設した、児童心理治療施設「望みの門木下記念学園」の敷地内へと移転しました。新しくきれいになった施設は、利用者の方々にも喜んでいただいています。

さて、先日こんなことがありました。私は夏になると、自宅でミニトマト栽培に挑戦するのですが、何度挑戦しても上手く行かず、途中で枯れてしまったり、茎ばかり伸びて、実がならなかったり。どうしてうまくいかないのかな、と軽い気持ちで野菜栽培が得意な職員に話したところ、水や肥料の与え過ぎを指摘されました、上手く行かない度に今度こ



そと意気込んで、世話を焼きすぎてしまったようです。

この話をしながら、植物の栽培と子育ては似ているな、と感じました。子どもたちは植物のような存在で、「適切な環境」があれば、子どもたちの持つ力で、大きく育ち、いつか花や実を付けるのだと思います。植物が種類によって栽培方法が異なるように「適切な環境」も子ども一人ひとり、異なるのです。善し悪しでなく、子どもたちはそれぞれ特徴を持っていきます。その特徴を見極め、子どもが力を発揮できるように環境を整えることが必要です。

また土の成分で野菜の味や花色が変化するように養育者の持つ特徴も子どもが育つ環境を作る大切な要素です。子どもと養育者の関係性によってその育ちは変化します。上手く行かないと感じた時、一人で頑張

りすぎず、家族や地域、行政機関や子どもたちの通う保育所・幼稚園・学校等、また私たちのような相談機関等、様々な資源を活用して「適切な環境」が用意できればよいのではないでしょうか。その中で、ピーターパンの家は、身近な子育て応援団として、困ったときに気軽に相談してもらえる児童家庭支援センターを目指しています。養育者に寄り添い、そのお子さんにとっての「適切な環境」を一緒に考え、そしてその子が、どんな花や実を付けてくれるのか一緒に見守れる場所でありたいと思っています。

私たちはまだまだ若い児童家庭支援センターです。地域の中で育てていただいていると感じています。子どもたちの育ちに負けなように、私たちも専門性に磨きをかけ、地域に必要とされるセンターになれるよう努力していきたいと思っています。

情緒障害児短期治療施設 望みの門木下記念学園 生活のはじまり

保育士 松本 久美

新緑の眩しい五月、千葉県初の情緒障害児短期治療施設「望みの門木下記念学園」が開設されました。

全国で四十五番目の情緒障害児短期治療施

設で、心に傷を持ち、生きづらさを抱えて人と関わる事が難しくなっ
た小学生・中学生が、生活を通して心の回復を目指していく施設です。



入所定員は三十名。園内には、子どもたちが暮らす生活棟と、君津特別支援学校・上総湊分教室が併設され、現在八名の児童が、生活と学びをスタートさせています。緑の山々、輝く海、まぶしい太陽、豊かな自然の力が、子どもたちの生活に、生きる力と、新鮮な空気を届けてくれます。学園内にも、様々な植物や昆虫、つり堀にはザリガニなど、子どもたちの良き遊びが暮らしており、笑顔の素になっています。

子どもたちを応援する大人は、児童指導員・保育士が生活を、医師・看護師・心理士は心

身の健康を、栄養士・調理師が心のこもった温かな食事を、先生方は教育で、健やかな発達と成長を見守り、ともにすごしています。入所した子どもたちは、共同生活での戸惑いから生まれる喜怒哀楽を体現しながら、現在パワフルに成長中。目下、夢中になっているのは自転車遊び！初めてのことには臆病になりがち子どもも、転んでは立ち上がりの繰り返しで、チャレンジ魂に火がつき、向上心も芽生えだしました。日に日に焼け、逞しい姿も見られます。

開設後、初めて迎える夏休みは、子どもたちにとって、新たな宝物を見つける絶好のチャンスです。海水浴・水遊びなどの様々な体験が、これからの子どもたちの生活にプラスの力と自信になることと思います。

心に傷を持つ子どもたちとの日常は、正直、戸惑いと失敗の連続です。支援する大人が心をひとつに、子どもとともに成長できる、健やかな気風づくりを目指したいと思えます。



バザー報告

六月四日(土)今年も望みの門バザーを開催することができました。尊い献金・献品を頂戴しました皆さま、当日ご来場いただきましたお客様、ボランティアの皆さま、またお祈りのうちにバザーをお支え下さったすべての皆さまに心より感謝いたします。なにかとご不便をおかけしたと思いますが、今後とも望みの門をご支援いただけると幸いです。

望みの門バザー収支報告

2016/6/13

単位：円

収 入		支 出	
中古衣料	239,280	材 料 費	276,271
雑 貨	503,917	雑 費	335,992
ベーカリー	171,270	通 信 費	2,706
屋 台	312,786	本部繰入金	892,184
新 品	92,400		
家 具	29,400		
その他収入	21,100		
寄 付 金	137,000		
収入計	1,507,153	支出計	1,507,153

上記のとおり報告いたします。

望みの門支援バザー実行委員会

委員長 井本 義孝

社会福祉法人ミッドナイトミッションのぞみ会 平成27年度 決算報告

貸借対照表

(単位：千円)

科 目	金 額
資 産 の 部	
流動資産	823,164
固定資産	3,185,780
(基本財産)	2,461,610
(その他の固定資産)	724,170
資産の部合計	4,008,944
負 債 の 部	
流動負債	359,434
固定負債	871,392
負債の部合計	1,230,827
純 資 産 の 部	
基本金	723,021
国庫補助金等特別積立金	854,766
その他の積立金	473,651
次期繰越活動増減差額	726,677
(うち当期活動増減差額)	33,352
純資産の部合計	2,778,117

事業活動計算書

(単位：千円)

科 目	金 額
サービス活動収益	1,461,591
サービス活動費用	1,430,945
サービス活動増減差額	30,645
サービス活動外収益	6,230
サービス活動外費用	6,610
サービス活動外増減差額	△ 379
経常増減差額	30,266
特別収益	281,645
特別費用	278,559
特別増減差額	3,086
当期活動増減差額	33,352
前期繰越活動増減差額	753,324
当期末繰越活動増減差額	786,677
基本金取崩額	0
その他の積立金取崩額	0
その他の積立金積立額	60,000
次期繰越活動増減差額	726,677

資金収支計算書

(単位：千円)

科 目	金 額
事業活動収入	1,466,874
事業活動支出	1,353,209
事業活動資金収支差額	113,664
施設整備等収入	483,431
施設整備等支出	524,474
福祉事業活動収支差額	△ 41,043
その他の活動収入	252
その他の活動支出	61,179
その他の活動資金収支差額	△ 60,926
当期資金収支差額	11,693
前期末支払資金残高	526,562
当期末支払資金残高	538,256

※ホームページ

http://
www.nozominomon.or.jp/



編集後記

三十年近く望みの門京葉後援会会長として法人を支えてくださった石井錦一先生が天に召された。突然のことである。しかし先生はそのことを予知されていた如く六月二十五日の総会にて、今まで置かなかつた副会長職を新設され、松戸教会牧師村上恵理也師を指名されていたという。実に見事な幕の引き方であった。かくありたいと願うが誰にもできる事ではない。

さて五月一日に開設した「望みの門木下記念学園」は前園長の退職に伴い六月中旬新人事が発表され、新園長のもとで運営がスタートした。着任してまず感心したのは、打ち合わせが終わればそのまま、賛美、聖書朗読、祈りと続き法人理念の唱和で終わることであった。

残念ながら目下は悪戦苦闘中であるが、これは二、三のベテランを除き職員が多くが未経験者であることに起因していることにあるため、今は止むを得まい。その中でもこの七月二十日には最初の終業式を迎え、職員と共に陪席し感無量のものがあつた。

(Y・I)

